

ここで、そのときの一連の魂の動きとその流れを創作シナリオを組み入れて紹介することにしましよう。

第二章

魂を乗せた一羽の折鶴

出会いの場所は広島平和記念公園の元安川に架かる元安橋の上。出会いの魂は、新聞の折り込み広告で折られた「一羽の折鶴」でした。時は平成五年八月六日、昼の一二時一三分。

青く澄んだ

いのちの星

われらの“地球”

地球初の洗礼

原爆の傷跡まだ癒えず

人類初の洗礼“広島”

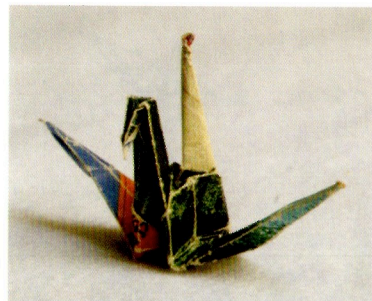


原爆ドームを目の前にした元安橋に降り立った一羽の折鶴は、新聞の折り込み広告紙でつくられた小さな鶴でした。橋を渡りきった公園の中には、原爆の子の像があります。頭上高く折鶴をかかげて、今まさに飛び立とうとする女の子の姿です。橋の上の一羽の折鶴は、どこから、誰が運んでくれたのでしょうか。千羽鶴が収められている原爆の子の像から一羽だけがどうして抜け出したのでしょうか？ 本当に不思議なことです。

折鶴の中心を、細い糸で順々に幾重にも通して結ばれる千羽鶴です。一番下の折り鶴が抜けたとしたら、上からの重みで多くの鶴が抜け出します。中の鶴が抜けたのであれば、紙が裂けることになるでしょう。さらにあの雑踏の中で傷一つない折り鶴が降りたつていたので、不思議な驚きです。宣伝広告紙でつくられていたのは、天から何かを知らせてくれる神Ⅱ紙の広告ではないのか。「紙」は「神」

原爆の傷跡まだ癒えず
そして「長崎」
地球も広島も長崎も
魂の傷跡いまだ癒えず
広島
元安川の
元安橋に降り立った
「二羽の折鶴」
平和のシンボル「折鶴」
万霊が集いに集う元安橋
元・安らぎの川原に集う万霊万魂
万霊集う平和の集い
元・安らぎの元安橋に
一羽の折鶴が降りた
平和の折鶴が降りた





元安橋の一羽の折鶴

で、いのち（ご意志）からの、広く告げたい知らせがあったのではないのでしょうか。その一羽の折鶴は、遠く東北から訪れた人たちの手によって拾い上げられたのでした。

時は、平成五（一九九三）年八月六日の昼。拾い上げた折鶴を持って一同は近くの地下食堂に入り、混み合っていました。空いていた片隅のテーブルに寄り集まって、なぜか折鶴を開きたい衝動に誘われて、扉開きのように折り込み部分の一つ、また一つと開き始めたのです。開いた折鶴は手のひらに入ってしまうほど小さな紙でしたが、それを見た瞬間「一二時一三分だ、日と月だ！」と叫んだ私の声は、天声のようなひびき声になって、ざわめく店内も様子が一変、その場の気は止まり、別世界のタイムトンネルに吸い込まれたのです。

開かれた折鶴は元の姿に戻され、ふくよかな立体となって、生気を取り戻しましたが、不思議や不思議、その姿は見る見るうちに変わっていききました。しだいに輝きを増していき、白銀の光を放ちながら大きく羽ばたく鶴の姿となり、眩しいまでの天女の鶴の姿に生まれ変わっていたのです。そして折鶴が降り立ったはずの元安橋は消え、なんと、

天女の鶴を乗せた「いのち舟」に変わっているではありませんか。そのいのち舟は、自在無限の原子の光となって、新しい次元の、いのちの世界へと道案内を始めようとしていたのです。

何も知らない天女の鶴は、ここがどこで自分が誰なのか、いのち舟に乗ってはいるものの、何をどうしたらいいのかわからず、下界をぐるりと見回してみると、一面が緑の大地で包まれていて、中ほどには清く澄み渡って美しい川が流れていました。

大地の緑は名も知らぬ草の群生であることがわかりました。川原一帯は色とりどりの宝石の輝きに満ちていました。天女の鶴を引きつけたもう一つの光景は、黒い骨格だけのドーム状の建造物でした。一体何の建物なのかと不思議に感じたそのとき天の窓が一気に開いたかと思うと、雷鳴にもまさるエコーの効いた声がひびきわたったのです。天の声「いや、驚かせてすまん

今日からお前さんを、つる姫」と呼ぶことにしたぞ

詳しいことは今少し待つがよい」

と、ひとこと言い終わると、天の声はそこでぴたりと止まりました。

「つる姫」と名前をいただいたことで自分が誰であるかを知った姫は、うれしさで喜

びが高まるばかりでしたが、いのち舟には何の変化も見えず、黄金に輝いて宙に浮いたままでした。

つる姫が、再び下界に視線を向けようとしたそのとき、再び鈴の音とともに、天の声「待たせたな

先ほどは、お前さんをつる姫と呼ぶことを知らせたがここからは、つる姫の仕事を知らせることにする

天の川原にいのち舟のナビ大王たちを集めて

つる姫の仕事について話し合った結果

つる姫には、「心の国」の「縁結びの大使」として派遣することにしたのでその国というのは、天の川原から見ると

ブルーのとても美しい「地球」という星の中であって

拡大して見ると星の中くらいには細長い勾玉のような浮島が見えるのじゃ

その島の姿が、「心の文字」に似ていることから

その国を「心の国」と呼んでおる

天の川をぐんぐん下っていくとまもなく支流が見えてくる

その支流の名が「元安川」というのだ

その流れは心の中ほどに続いておって

広く緑につつまれた中央を流れておるのじゃ

そこには元安橋という橋があるからよく覚えておけよ

その辺り一帯を「広い島」といってなあ

心の国では「広島」と呼ぶそうだ

天の川の支流がここに流れているということは

すなわち安らぎの天国なのだぞ

今一度

つる姫の仕事は「縁結びの大使」であることを忘れずに励んでくれよそれからつる姫のいのち舟にはレギュラークルーとして

次の者を配置しておいた

船長はナビ大王

かずたま姫

もじたまの皇子

いろたま姫
の四名であるから

わからないことがあつたら遠慮なく尋ねるがよい
最後にこのわしは、いのち舟^{フネ}のオーナー、

天の声

とても覚えておくがよい

ではナビ大王出発進行せよ」

と天の声が発すると、ナビ大王はいのち舟のエンジンを全開にして高度を一気に上昇させたのでした。

元安橋上空に停止していたいのち舟はみるみる高度を上げて、元安川に沿って上昇を続けて間もなく天の川本流に合流し、ここでナビ大王は、いのち舟のオーナーに、つる姫を確かに預かり天意を申し受けたことのあいさつを送ったのです。黄金の光を三回点滅させて、あいさつを終えると、ただちに心の国へ向けて下降を開始しました。本流の天の川を下り、さらに、支流の元安川をぐんぐん下降するにつれ、心の国が本当に、心の文字の姿^{カタ}に似ていることに気づいたつる姫は、胸が熱くなる思いで見続けていまし

た。

いよいよ高度を下げると広島街が見えてきて、懐かしい元安橋はすぐ眼下にありました。つる姫は、いのちの親様から辞令を受けた、縁結びの大使^{トモ}の任務を、人類の平和のためにお役に立てますようにと、新しい次元の世界へと飛び立つことになったのです。

縁結びの大使となつたつる姫は、これからの旅の準備のために、いのち舟のナビ大王スタッフとともに、その打ち合わせに忙しくなりました。ナビ大王はたえずニコニコしていますが、つる姫はなんとなく落ち着かない様子です。それもそのはず、つる姫は天の川で育った一人娘、これまで他の星へ渡ったことなどありませんでした。それなのに、急に縁結びの大使を申しつけられて心の国にやって来たのですから、落ち着かないのも無理のないことでした。とはいっても、さすがに天の川育ちのつる姫は、心の国の魂の気を察知するのも実に早く、気を取り戻したつる姫を見ていたナビ大王が初めて口を開きました。

ナビ大王「つる姫様、大役ご苦労様です

このいのち舟の責任者として私どもスタッフは

つる姫様の任務がスムーズに運びますように心がけてまいります
なんなりと申しつけてください

いのち舟にはナビゲーション・システム機能が整っております

心の国のことはすべてデータ化されていますから

必要事項はただちに画像化されるようになっております

心の国という名は親様がつけたものです

この国の人々は日の本国と呼んでおり、稲作文化が大変進んでいる国です

また、この舟の名は『であい号』

これもまた親様が命名してくれたものです

あとはつる姫様の指示を待つばかりのスタンバイに入っております」

と、ナビ大王があいさつを終えると、

つる姫「ナビ大王、ありがとうございます」

スタッフのみなさん、よろしく

私は心の国がとても気に入りました

先ほどから見とれていたのですが

どちらを見ても大地には緑一面のつる草が生えています

私はこの草が大好きになりました

なんとという草でしょうか」

ナビ大王「つる姫様

その草は「心のつる草」別名は『であい草』といっています

一つとして花の色が同じものはありません

千万色のいろどりが最大の特徴となっております」

つる姫「それを聞いてますます好きになりました

名前が『であい草』というから私にぴったりの名前ですよ

ほら、いのち舟は『であい号』でしょう

それに私は『縁結びの大使』ですから

であい草と縁結びはぴったりじゃないですか

目の前がパッと明るくなりました」

と、思いがけないナビ大王の説明で一気に明るくなったつる姫は、それまでとはまったく別人のように変わったのです。

出合いの縁結びは、人々の暮らしや、人生の明暗に大きく影響を及ぼすものです。ときにはやさしく、ときには厳しく、天の川の不滅の法則を、ここでも緩めることなく見ていかねばならないのだとつる姫は思っていました。

「縁はいのちの調和力」といって、天の川では「天意の法則」の一つにかかげられています。天意の法則は、広い宇宙の星々が、互いに安定してその軌道を回るように定められています。天の川に生まれたつる姫が、この法則を忘れることはありません。

つる姫の姿は見違えるほどに輝きはじめています。いのち舟も一層輝きだしました。一帯を見わたすと、大地に生えていた『であい草』も生き生きと色とりどりの花を咲かせているのがはつきりとわかってきました。

であい草は、心のつる草とも、縁のつる草とも呼ばれています。人々の魂（心）の化身なのです。いのちの母体となる大地の上では、億万年にわたって積み上げられてきた「心の土壌」が、心の国の人々の魂のふる里になっているのです。

その魂のふる里は「心の大地」と呼ばれています。その心の大地に育ち続けているのが、心のつる草という「であい草」なのです。万色万花に咲き誇る心のつる草は、人々の道しるべとなる「であい草」となって、思い思いに、この世一杯に伸び続けているのです。

いのち舟の中で、ナビ大王他スタッフ一同がつる姫のゴーサインを今か今かと心待ちにしていると、つる姫の口から意外な言葉が出てきました。
つる姫「ナビ大王さん

今縁結びのことです

出合いを結ぶということは人々の心ごころの色合いをみて

こちらとあちら、あちらとこちらという具合に心と心をつなげるには

その心のひびきを正しく見届けなくてはいけません

ともに触れ合い、ともにひびき合い、ともにときを同じくして

人と人、心と心をつなげる必要はありません

一言でいえば、共振共鳴共時性ということです

このことを人々の世界では偶然の一致といつて

単に不思議なこととして流しています

天の川には「偶然」という二文字はありません

心の国の人々は天の川の「天意の法則」のことはまったくご存じないようです
ところが…」

ナビ大王「すみません、つる姫様

ここまで聞けばナビの私にも話の続きをはつきり受け取ることができません

共振共鳴共時性に心血を注いできた人々がいたことを忘れてはなりません

まずは、その先人たちに表敬訪問をしたいと

つる姫様は思われたのではないでしょうか？」

つる姫「あら、さすがはナビ大王、その通りです

これより、先人たちに表敬訪問をしたいと思っていたのです

ありがとうございます」

と、つる姫に言われたナビ大王は、少々照れてはいますが、四方八方に光のアンテナを向けているのち舟の船長はさすがです。話が一致したことで、相互信頼の光がきらめきました。つる姫はナビ大王に、ナビ大王はつる姫に、心をともししての縁結びの仕事始めとなったのです。

つる姫「ナビ大王

最初の訪問先はスイスの国と決めましたよ」

ナビ大王には一心同体のつる姫の思っていることは、一言でわかりました。

ナビ大王「はい、つる姫様、ただちに出発準備に入ります」

と、目を輝かせて答えます。

スイスの国といえば、あの博士の国のことです。精神科医として、深層心理学・分析心理学を立ち上げ、自らは心理療法臨床医として活躍され、人類史上に多大の研究業績を残され、人生の後半においては、つる姫のいう「偶然の一致」についての必然性を実証的に学問追究された『カール・グスタフ・ユング博士』を訪ねることになったのです。ユング博士は、一八七五（明治八）年七月二六日に誕生して、一九六一（昭和三八）年六月六日に亡くなられました。享年八六歳（数え年）の生涯でした。

出発に際してナビ大王は、ディスポレー画像に情報の取り込みを始めています。スタッフにもスタンバイを伝えました。そして、いよいよ出発です。

いのち舟は一旦上昇すると光の渦を巻いて方角を西に定め、一気に直進を始めました。目の前には、滑走路に灯る誘導灯のように、直線に一齐に明かりが灯りました。

いのち舟は光です。現実には誰にも見えませんが、魂はいのち舟に乗って自在無限の旅をするのです。

いのち舟は、一路スイスの国に向けて進みました。中国・インド上空を横断して右に

はヒマラヤ山脈が流れています。まもなく黒海上空を通過すると、風光明媚なスイスに入りました。眼下には中央アルプスの山々が流麗な白銀の雪渓に彩られて、その峰々のなんと神々しいことか。また、手を取りあつて楽しむわらわたちにも似て大小の湖が点在しています。澄んだコバルトブルーがとても美しい。

スイスは、世界有数の観光大国といわれる、世界文化遺産と自然遺産が合計で十あります（二〇一一年四月現在）。連邦共和国制の永世中立国で、独特の強靱な精神風土が根差しているといわれています。

ユング博士は、ドイツ国境に近い北部に位置するチューリッヒ湖のキウスナハトでその生涯を終えています。

しばらくナビ画像に目を向けていたナビ大王は、つる姫にうかがいをたてました。

ナビ大王「つる姫様、スイスの上空に入りました」

ユング博士にはキウスナハトの自宅と、湖畔には塔という別宅があります

塔の家は一九二三年から五五年にかけての長期にわたつて

ご自分でつくられて完成されています

いわばこの塔こそ博士の深層太古の意識体験の場でありました

どちらに参りましょうか、ただ今いのち舟は自宅上空におります」

つる姫「ナビ大王、博士の自宅に参ります」

いのち舟は、キウスナハトの上空で一旦停止すると、静かに下降を始めました。墓地も自宅も眼下にあります。つる姫は、墓地の前に停止するようにと伝えます。墓前に降り立ったいのち舟は、自宅と墓前に向けて『最大礼』のいのちの光を三回点滅して表敬のあいさつとしたのです。このとき、天上いっばいから金銀の光の粉がキラキラと降り注がれてきました。それは、天の川からでありました。宇宙最大のモニターで見えていたつる姫の親元からの贈り物です。

ナビ大王「つる姫様、ただ今ナビ画像にユング博士からのメッセージが入りました」

つる姫「ナビ大王、どんなことですか」

ナビ大王「ツルヒメサマ・イチドウ・アリガトウ

ジブノ・マナビ・アマノガワニトドキ、カンシャ・シゴクデス

という内容になっております。以上です」

それを聞いたつる姫は、『ジブノマナビ』という言葉でユング博士が何を言わんとしているのかを理解することができました。共時性の法則が天意に根差す根源的なもの

だという考えに立って、総合的な学問を動員する必要性を提示しているのです。特に心理学と物理学に注目していたユング博士の思いが、つる姫にはつきりと受け入れられたのでした。

いのち舟は、そこを出発すると一度上昇をしてから北へ進路を向け、湖を北上して、チューリッヒの街に程近い湖畔にやってきました。ここはボーリンゲンという地域です。眼下には、かの、塔の家が見えています。ここで一旦湖上に出て、湖面すれすれから塔の家を見ることにしたのです。

塔の姿を、湖面から見やることで、一段とユング博士の思いが深くひびく気がして、つる姫は感激で胸が熱くなっていました。

共振・共鳴・共時性の世界は、いのちの本質からほぼしる、最も中心となる縁結びのエネルギーなのです。ユング博士は、深層太古の、母なる胎内に体験的に入りたかったのであり、この塔こそ、そのマンダラといえます。長期にわたり四、五回の増築を重ねて、自分で完成させてきました。ほぼしる共時性への探求の情熱をもって、太古の生活をみずからの体験として折り込みながら、内向性を極限まで深めた仙境の塔でした。つる姫は、それを体でしみじみと受け止めていました。そして、ナビ大王に表敬のあい

さつを申し伝えましたのです。

つる姫「それではナビ大王、このままで湖面からの最高礼のあいさつです

スタツフ一同も中央に集まってください」

と、指示を受けたナビ大王は、いのち舟を静かに揺らしながら、塔いっばいに、黄金の光を三回点滅させました。墓前のとくと同じく、天上の天の川からも金粉がとめどなく降り注がれ、湖面のさざ波に映し出された光景は至福の絶頂でありました。

このとき、不思議なことに、塔の家が、目の前から忽然と消え、そして天上からは、鈴の音とともに荘厳なひびきが鳴りわたったのです。

天の声「つる姫よ、つる姫

ユングをいのち舟に乗船させよ

縁結びに同行させよ

心の国に同行させよ」

声が止まったと思うや、いのち舟は上下左右に激しく揺れだしました。それは、心の国への出発の合図でもあったのです。

かくしてユング博士もつる姫一行のクルーの一員となって、心の国へと戻ることにな

りました。つる姫一行は、ユング博士が乗船することで、にぎやかな雰囲気にも包まれています。ボーリンゲンの塔の家を出発したいのち舟は、帰路のコースをぐっと南に取り、地中海上空に出てからは進路を東に向けて、インド洋上空を直進して行くことにしました。

コースを決めた頃からナビ大王にはサービス精神が湧き始め、珍客が乗船していたから少しは喜ばせたいと思い、大きな声で話を始めました。
ナビ大王「わしが天の川にいたころの話ですが

ある日、星々の代表一同が天の川に集合したとき

親様が水の惑星『地球』をつくるときは

他の惑星とはまるで発想の違う星づくり作業だったと言うのです

たとえば、スイスを出発して高度を上げて見ると

南下するほどに、イタリアの国の全容が目に入ります

なんとその姿は貴夫人のロングブーツに仕上げられています

見事です

また、地中海から紅海上空に出て、そこから左手の国を見ると

熱暑の砂漠の海に波打つ波紋がいかにも、親様の作品なのです

雪国にもまさる、ふわふわのあつたかい

スノーブーツに見えてくるのがわかります

その国がアラビア半島のサウジアラビアという国です

親様の遊び心が素晴らしいじゃないですか」

ナビ大王の説明はきりなく続きそうでしたが、ここでつる姫からアイ・サインが出されました。はっと思ったナビ大王が話を中断すると、

つる姫「ナビ大王は天から降ったような話をするからみなさん楽しいでしょう

ところで、心の国も間もなくです

縁結びの仕事も本番に入りますから

その前に、一つ二つ話をしておきたいことがあります

一つは、ユング博士の呼び方を変えます

博士号は脱いでいただくことにして、ユングさんと呼びましょう

もう一つは

ナビ大王配下の三名のクルーの話です

いのち舟には「三心三蔵」といって三つの蔵があります
文字・数・色という心の蔵ですが、これは魂を入れる蔵なのです
ユングさんは自分で学んだ深層意識や元型などの世界に
置き換えてみるとよいでしょう

この魂の蔵を担当するのが
かずたま姫、もじたまの皇子、いろたま姫の三クルーです
心の国では、大地一面に「であい草」が生えています
その花は、万色万花で花の色が一つとして同じものではありません
花の色だけではありません

であい草から発散する量的波動（数霊）や、
文字的波動（文字霊）は一本一本すべて異なります

「であい草の個性」は、類似はあっても

同一の草は一本もないのです

であい草からびびく文字・数・色の霊気を詳細にキャッチするのが
三心三蔵の担当クルーの役目ということになります

かずたま姫たち、しつかり頼みますよ

これらの情報データを迅速に処理して縁結びの指示を出すのが

大使役の私ということになります

そして、ナビ大王はいのち舟の責任者であって

運命の舵をきちつと握っておられます

心の国は目の前に迫りましたから

ナビ大王、これより二人の方にあいさつをしてから本業に入りますよ

ナビ大王「わかりました、つる姫さま

ただ今いのち舟は大阪上空を通過中です」

つる姫「ナビ大王

あいさつする二人とは京都のカワイ博士と東京のタマヒロ社長です

まずカワイ博士にあいさつしましょう」

と指示を受けたナビ大王は、親様が国づくりで見せた楽しい遊び心の話から頭を切り
替えてはと真剣になっています。ナビ画像にはカワイ博士のデータが映し出されて
いました。